

R.シューマンの作品《おとぎの絵本》を用いたソルフェージュ教育の可能性：
基礎的な学習から表現する力をつける

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-21 キーワード (Ja): ロベルト・シューマン, おとぎの絵本 キーワード (En): Robert Schumann, Märchenbilder, solfège Education 作成者: 井上, 渚, Inoue, Nagisa メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/688

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



R. シューマンの作品《おとぎの絵本》を用いた ソルフェージュ教育の可能性

—基礎的な学習から表現する力をつける—

The possible ways to use Schumann's "Märchenbilder" in solfège education:
Enhancing interpretative skills through basic studies

井 上 渚

Nagisa Inoue

1 はじめに

演奏家は作曲家の書いた作品を楽譜から読み取り自分なりの解釈を考え表現しなければならない。そのために音程感、リズム、和声、強弱、アーティキュレーションを理解し、瞬時に反応出来るよう読譜能力をつけ、音楽理論を実際の曲に結び付けるための訓練をすることが大切である。音楽を表現する際、「技術」と「理論」の両方考える必要があるが、この研究ノートでは「理論」の訓練の1つであるソルフェージュの教育について考えた。今回はシューマン (Robert Alexander Schumann, 1810-1856) の《おとぎの絵本》op113を用い、実際の芸術作品を学習に取り入れることよりに、ソルフェージュの基礎的な訓練が芸術作品の理解にどのように繋がっていくか、また、実際の楽譜のどのような個所に注意して読譜をするのかを考察したい。

この曲は1851年に作曲され、以下の4曲からなる。

第1曲 Nicht schnell (d-moll)

第2曲 Lebhaft (F-dur)

第3曲 Rasch (d-moll)

第4曲 Langsam mit melancholischem Ausdruck (D-dur)

この曲を選んだ理由として、第一にタイトルからも想像できるように曲を聴いて情景を想像しやすく、第1曲目から第4曲目までで構成されており、それぞれ異なった個性があるからである。1曲目は和声の変化の美しさ、2曲目は複付点、付点のリズムで馬の足音を表現し、3曲目は旋回するようなヴィオラの動き、4曲目は歌うような美しいメロディーと、それぞれの特徴があり、ハーモニー、リズム、メロディーと音楽の3要素全てこの曲から学習できる。

第二に、タイトルから、子供を意識して書いた作品であると想像するが、音楽的な深さと、テクニクからみて、子供のためのみに書かれた曲ではない。この曲はデュッセルドルフの管弦楽団コンサートマスターのヴァジェレフスキ (Wilhelm Joseph von Wasielewski) による演奏を念頭においた作品である。タイトルと、4曲それぞれ異なった曲想、そして情景を想像しやすいということから、子供が学習

するのにも、曲の内容から見て大人が学習するのにも、幅広い世代の学習に適している。

第三に、この曲がヴァイオラ、ピアノの二重奏であることである。ヴァイオリンとはまた違うヴァイオラの音色を感じてアルト譜表を読む訓練をすること、次に三重奏、四重奏とは違い、二種類しか音がないために譜面を読む際、音を捉える際にもじっくり学ぶことが出来、アンサンブルを楽しめる能力を付ける訓練をするためである。

ソルフェージュを学ぶにあたり、演奏に役立て、表現力を身に付けてほしいと考えているが、《おとぎの絵本》というシューマンの作品を用いることにより、ただ課題を実施し、ソルフェージュ能力を上げることのみを目的とするよりも、なぜこのように作曲したかなど、シューマンの作品の魅力を理解することも大切だと考えるので、学習者がソルフェージュを学ぶ重要性を理解する上でも、ところどころソルフェージュ課題と平行しアナリーゼ的要素やシューマンの作曲技法的要素を考える学習を提案していきたい。

第1曲目はソルフェージュの初心者に向けて、そして曲が進むにつれてソルフェージュ的にも音楽を理解する深さでも難易度が上がるように学習を組み立てた。馴染みのある作曲家の曲を学習に使用することにより、何のためにソルフェージュを学ぶのか、また学んだ知識をどのように実際の音楽に役立てるのかをもう一度考えるきっかけになるようにと考える。

文中に記した小節番号は全て原譜の小節番号を示す。また読譜訓練の一つとして「クレ読み」と文中に記したが、「クレ読み」とは様々な音部記号を読譜する訓練である。

2 第1曲 Nicht schnell (d-moll) : 旋律・ハーモニーを捉える

16分音符の旋回するような動きの中でハーモニーが次々と変わっていく特徴がある。まず最初の8小節の和音記号を表示すると譜例1のようになる。

譜例1 第1曲（第1小節～第8小節）

The image shows a musical score for the first 8 measures of the piece 'Nicht schnell' in D minor. It consists of two systems, each with a Viola part (top staff) and a Piano part (bottom staff). The key signature has two flats (B-flat and E-flat), and the time signature is 3/4. The Piano part includes dynamic markings like 'p' and 'piano', and various fingering and articulation symbols such as 'I', 'II', 'V', and '5'. The Viola part has similar markings and includes some slurs and accents.

トニック = T サブドミナント = S ドミナント = D と表記すると、この8小節の進行として T-S-D-T-S-D-T-S-D-T となっていて、とても親しみやすい和音進行である。4小節目に出てくる、4度上の属9の根音省略の和音と6小節目に出てくるナボリの2度の和音が響き、とても印象的である。またソルフェージュとして和声聴音の問題を作ると以下ようになる（譜例2）。和声聴音に適するように2/2拍子に変えた形である。これを聴音した後、和音記号を考え、譜例1の楽譜のどこにこの和音があてはまるか学習するのも良い。

また譜例1のヴィオラのパートはリズムが優しく、アルト記号を習い始めた学習者にとってクレ読みの学習に適している。

譜例2 作成課題



最初の8小節間に対応し、後半58小節～72小節目（譜例3-1）まで比較しながら学習するのも良い。この15小節間はViolaが最初の8小節間の再現になるが、曲の冒頭と比較すると、最初のメロディーをなぞっているがリズムが変わり、65小節目から終わりに向けてこの曲の特徴の16分音符の旋回するような動きが入っている。アルト記号とト音記号が交互に表示されるため、クレ読みの学習に適している。また3拍目から1拍目にかけてタイが連続して出てくるため、拍をずらさないで書けるようにする学習、導音などの臨時記号を書く練習としてメロディー聴音の学習にもなる。

譜例3-1 第1曲 ヴィオラパート（第58小節～70小節）



譜例3-1のピアノのパートを最初の8小節間を比較するのも良い。譜例3-2は譜例3-1の伴奏譜である。伴奏は冒頭の8小節間の和音進行をなぞっているが、右手のパートにも16分音符の旋回するようなモチーフが入っている。ピアノ伴奏を弾き、バスのパートだけを書き取りを行い、バスのパートが15小節間属音保持と主音のみで成り立っていることをアナリーゼする。この学習はソルフェージュだけではなく、曲の構造を知った上で演奏するという、実際の演奏にも結び付く学習である。

譜例 3-2 第1曲 ピアノバート (第58小節～72小節)

Schumann, Robert.1991. Märchenbilder Vier Stücke für Viola und Klavier op.113. より

またへ音記号のパートを取り出し、リズムのみを表記すると譜例4のようになる。シンコペーションとタイが多く出てきてリズム打ちの学習にもなる。

譜例 4 作成課題

またこの譜例 3-1 と譜例 4 を組み合わせクレ読みとリズム打ちを同時に行う学習も良い。

四

3 第2曲 Lebhaft (F-dur) : リズムを捉える

最初に、「Lebhaft」活発な、生き生きした、と表示されている。この楽章は付点の付いたリズムから、ギャロップで馬が足音を響かせかけている様子が想像できるため、リズム練習に良いと考える。また曲の冒頭も 32分音符のアウトタクトから始まっており、2小節目には複付点の付いた4分音符のリズムに、また 32分音符が続く (譜例5)。この 32分音符の出だしのアウトタクトより、曲が始まる前からの準備、

呼吸の使い方が学べると考える。また細かい音符に慣れていくリズム練習として適している。調性に関して第1曲目がd-mollだったのに対し、第2曲目がF-durである。平行調という調性関係について音階を書いて説明するのも良い。

譜例5 第2曲 ヴィオラパート (第1小節～第4小節)



22小節目から31小節目までのヴィオラのパートには複付点と32分音符、3連符が混ざって出てくるのでリズム練習に良い。また同じ小節のピアノのバスパートにも付点のリズム、8分音符、そして3連符が出てくる。このバスパートのリズムのみを取り出しリズム練習をする際、複数人でのソルフェージュ学習の場合、2つにグループ分けをし、ヴィオラパートのリズム打ち、ピアノのバスパートのリズム打ちを同時に行うのも良い(譜例6)。

譜例6 作成課題



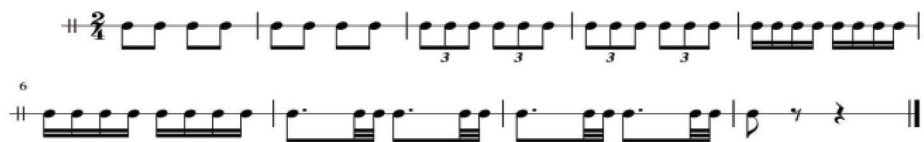
31小節目のアウトタクトから46小節目の2拍目のF音までのヴィオラパートをト音記号でのクレ読みに適している。付点のリズムと3連符、そして特に34小節目から39小節目までの強拍にタイの付いた付点のリズム(譜例7)を正確に練習すること、そして跳躍の伴った音程を瞬時に読むことを意識して行う。アルト記号、テノール記号などに変換しての練習も可能である。

譜例7 第2曲 ヴィオラパート (第34小節～第39小節)



47小節目のヴィオラの3連符から51小節目のピアノの16分音符、それに続くヴィオラの付点のリズムを参考に、譜例8のリズム練習が出来る。これは1拍を2つ、3つ、4つ、そして付点とリズムを正確にとる練習になる。この譜例8を学習者でグループ分けをし、1小節ずつずらしながらカノンをすると、8分音符のなかに3連符の8分音符を入れる2対3の練習と、8分音符の3連符の中に16分音符を入れる3対4のリズム練習になる。

譜例8 作成課題



調性を感じとる学習として、47小節目から53小節目までピアノを演奏し何調に転調しているかを考える (譜例9)。

譜例9 第2曲 ピアノパート (第47小節~第53小節)



再現をした途中から調性が変わる部分である115小節目から121小節目までピアノを演奏し何調に転調しているかを考える (譜例10)。

譜例10 第2曲 ピアノパート (第115小節~第121小節)



F-durの平行調のd-mollに①は転調し、②はF-durの下属調のB-durに転調している。またどのように転調しているか考えてみる。①②ともF-durの属7の和音から始まっているが、①はd-mollの属9の根音省略の和音の第1転回形にいき、d-mollの属9の和音と1度の和音を繰り返す。それに対し②はB-durの2度7の和音にいき、B-durの属7の和音と1度の和音を繰り返している。

119小節目から142小節目まで16分音符が中心のヴィオラのパートはアルト譜表でのクレ読みの練習に適している。シューマンはここで、様々な和声を変えながらピアノの右手のパートとヴィオラのパートが同じ音型を繰り返し追いかけてくさをするように作曲している。この作曲技法を学ぶために譜例11のように2つのグループに分けて、グループ1はヴィオラのパートのクレ読み、グループ2はピアノの右手のパートのクレ読みを同時に行うと良い。またここに譜例12のようにピアノの左手の付点のリズムやシンコペーションのリズムを叩きながらクレ読みの練習をすると、さらに曲の持つ生き活きとした感じが体感できると考える。

譜例 11 第2曲 ヴィオラパートとピアノの右手パート（第119小節～第142小節）

譜例 12 作成課題

また119小節目から142小節目まで和音が変化していくため聴音の練習としてピアノのパートを弾き、コード又は和音記号がどのように変化し B-dur から 143 小節目の再現の F-dur に戻るか聴き取り考える練習もこの曲を学ぶ上で良い。

4 第3曲 Rasch (d-moll) : シューマンの作曲技法を捉える

Rasch、急いで、と表記されており、ヴィオラの16分音符の3連符でのアルペジオと力強いピアノの伴奏がとても印象的な楽章である。この楽章はヴィオラパートにアルト記号が多く特にアルペジオの部分は全体的にクレ読みに適している。

ソルフェージュ教育を目的として書いているが、ソルフェージュは音楽を深く読む力を育てることも目的とするので、ここでシューマンの作曲技法的要素にもふれたい。ヴィオラの音型、1小節目の1拍目 [D-F- \flat B-A-F-E] という音階を見ると d-moll の1度の和音の中に \flat BとEという非和音が混じっている。他の小節も弱拍を中心に非和音が入っているが、この非和音により、さらにこの音型に彩と迫力を与えている。ヴィオラに対しピアノのパートをみていくと、はじめの4小節間は2分音符で、1度、1度の第2転回形、4度、属9の根音省略の和音に最低音に d-moll の主音が響く、という和音進行になっている。5小節目から ff で堂々とした和音ときっぱりとしたリズムで動くが、4小節目まではそれを予感させるような激しさが和音の跳躍と強弱にある。1小節目の和音には p が表記され、2小節目の和音には sf が付き、sf にいたるまでには crescendo が付けられている。3、4小節目も同様である。ヴィオラのパートの強弱を見ると p から始まり、2、4小節目のピアノパートに sf が付いている部分には crescendo と decrescendo が書かれていて、最初の4小節間、緻密に強弱が書かれた楽譜である。ピアノの構造的にこの強弱を表現するのは不可能だがシューマンの内面的な激しさがここに表れていると考える（譜例13）。

譜例 13 第3曲（第1小節～第4小節）

The image shows a musical score for the first four measures of the third piece, 'Rasch', by Robert Schumann. The score is in 2/4 time and features two staves: Viola and Piano. The Viola part consists of a series of triplets of eighth notes, starting with a piano (p) dynamic. The Piano part consists of chords, starting with a piano (p) dynamic and moving to a sforzando (sf) dynamic. The score includes dynamic markings such as p, sf, and crescendo/decrescendo hairpins. The key signature is one flat (B-flat major/d minor), and the tempo is marked 'Rasch'.

37小節目～61小節目にかけて、 \flat 系の d-moll から \sharp 系の H-dur に転調して曲の雰囲気が一気にかわる。H-dur と d-moll の関係を考えると、決して近い調ではなく d-moll の同主調の6度調を長調にした調が H-dur である。学習者は、調性を考える練習として33小節目から42小節目までピアノを聴き、何調に転調したか考える学習が出来る。

調性が理解出来たら、今度は楽譜を見てどこからどのように転調しているか考える。36小節目に d-moll の主和音が ff で堂々と響く。その後 p で D・F 音が残り、37小節目に D・F 音から Dis・Fis と半音上がり、バス音に H-dur の主音が現れる。H-dur になるための準備の和音である H-dur のサブドミナント、ドミナントはなく唐突に d-moll から H-dur に転調するために浮遊感を感じる。d-moll から H-dur への転調に対し、H-dur から d-moll に戻る場面の和音記号を比較する。

譜例 14 作成課題



譜例 14 は 53 小節目から 64 小節目まで H-dur から d-moll の 1 度の和音が現れるまでの転調を要約した和声課題である。これを聴音し、どのように主調に戻ったか和音記号を考える。また実際の楽譜とも照らし合わせこの和音進行がどこにあてはまるかを考える。d-moll から H-dur へ転調した際は予備の和音進行はなかったが、H-dur から主調の d-moll に戻る際は d-moll のサブドミナント、ドミナント、そしてトニックのようになっている。転調の際に 2 回ともピアノの伴奏に共通点がある。36 小節目のアウトタクトから 39 小節目の頭まで右手に H-dur の属音を中心とした漂うような半音の動きがある。61 小節目のアウトタクトから 65 小節目の頭までにも d-moll の属音を中心とした漂うような半音の動きが今度は左手に現れる。このような特徴を感じ取ることも音楽を深読みする学習になる。

92 小節目のアウトタクトから 99 小節目までメロディーはなく、ヴィオラ、ピアノとも p で演奏し、少し不安定な不気味な雰囲気が 8 小節間続く（譜例 15）。この 8 小節間、グループでの学習と想定し、ピアノとヴィオラを実際に 2 人の生徒にゆっくり弾いてもらい、他の生徒は聴音をする。ヴィオラパートは学習のためにはアルト記号で書きとり、後にクレ読みの学習をする。聴音の後、実際の楽譜を見て、なぜ不安定な雰囲気が考える。まず指定された強弱の p が 8 小節間続くことと、今まで低音で支えのあったピアノの音域が高音域に移ったことにある。さらにピアノの和音を抽出すると、譜例 16 のようになり、譜例 15 のピアノと比べると、アウトタクトのスラーは非和声音から始まり半音上向し和声音になる、ということがわかる。これにより一瞬不協和音のように感じる箇所もある。さらにヴィオラパートを見てみると、3、4 拍間に D 音が持続していることがわかり、96 小節目からはさらに D 音は 1 オクターブ音域が上がっている。結果ヴィオラパートは主音保続が 8 小節間 p で続いていることがわかった。

譜例 15 第3曲 (第92小節~第99小節)

譜例 16 作成課題

100小節目のアウトタクトからヴィオラパートが急に *ff* になり、この楽章のメロディーのモチーフが登場する。ピアノも低音での支えが戻り、*f* で和音の堂々とした雰囲気をもどる。100小節目から終わりまでの8小節間でも、この楽章の特徴でもあった強弱の急激で大きな変化が登場し、104小節目の1拍目の *sfz* の次から *p* になり最後の小節の和音の前に *d-moll* の主和音のアルペジオが急に *ffz* で響き、フェルマータのついた *d-moll* の1度の和音で終了する。

5 第4曲 *Langsam mit melancholischem Ausdruck (D-dur)* :
一体となった旋律、和声を捉える

Langsam mit melancholischem Ausdruck と表記されており、直訳すると、ゆったりと遅く、メランコリックな表情を伴って、である。とても美しいメロディーをヴィオラが奏でる最終楽章である。ピアノの伴奏もヴィオラの3度下でメロディーを支えているのでハーモニーをより感じる事が出来、ほっとしたような一体感が出る。ヴィオラもピアノも *pp* で始まり、この最終楽章は *pp* と *p* の表記が大部分をしめる。全体的にアルト記号で歌う練習をするのに適した楽章である。個人的な感想であるが、美しいメロディーを *p*、*pp* でおさえられたように歌うことから子守歌を聴いている感覚がする。

D-dur という #系の調から始まるのは初めてであり、また $\frac{3}{8}$ 拍子という拍子も最終楽曲にして初めて出てくる。第1曲目を見てみると、d-moll $\frac{3}{4}$ 拍子であった。D-dur は d-moll の同主調であり、拍子の $\frac{3}{4}$ 拍子と $\frac{3}{8}$ 拍子は、中間の第2, 3曲目で共通する $\frac{2}{4}$ 拍子よりは共通点がある。なぜシューマンが第4曲目を $\frac{3}{4}$ 拍子ではなく $\frac{3}{8}$ 拍子で書いたのかという疑問が残る。 $\frac{6}{8}$ 拍子は1小節を2拍としてカウントする、つまり2拍子系の拍子であることから考えると、 $\frac{3}{8}$ 拍子は1小節を1拍として感じ、強・弱・弱と拍をとる $\frac{3}{4}$ 拍子の方が明確に拍を刻む3拍子系となり、流れ方、スラーの感じ方などニュアンスが異なる。この拍の感じ方の違いを学ぶために、 $\frac{3}{4}$ 拍子と $\frac{3}{8}$ 拍子とそれぞれ仮定して拍の感じ方を変え歌ってみると良い。 $\frac{3}{4}$ 拍子と仮定する際はピアノ伴奏を、強・弱・弱の $\frac{3}{4}$ 拍子をより感じられるよう譜例17のように変える。もしこの楽曲が $\frac{3}{4}$ 拍子だったらと仮定し、譜例17のように実際にピアノ伴奏を考え、楽譜を書く練習も良い。その際にはメロディーは変えずに拍感を強調するように注意をする。実際に楽譜を書くという練習は、シューマンがこの楽曲に $\frac{3}{8}$ 拍子を何故選んだかを考える上で良い。また自分で書いた $\frac{3}{4}$ 拍子の楽譜とシューマンの $\frac{3}{8}$ 拍子の楽譜を比べ、フレーズ感をつかむ。またそのまま楽譜を $\frac{3}{4}$ に書き換えても良い。私が受ける楽譜からの印象は $\frac{3}{4}$ 拍子の方が間延びした印象があり、1小節を1拍として感じる場合は $\frac{3}{8}$ 拍子の方が楽譜を見た際に演奏者は雰囲気感を掴むことが出来る。また第4曲目を D-dur の $\frac{3}{8}$ 拍子に設定することにより、第1曲目の d-moll の $\frac{3}{4}$ 拍子と、調性、拍感ともにシューマンが対比を図ったと仮定出来る。

譜例 17 作成課題

The image shows two systems of musical notation for piano accompaniment. Both systems are in D major (two sharps) and 3/8 time. The first system starts with a piano (pp) dynamic marking. The second system begins with a fermata over the first measure. The notation consists of a treble and bass clef staff with various rhythmic patterns and chordal accompaniment.

第1曲目、第3曲目はヴィオラとピアノのどちらかがメロディーでどちらかが伴奏の役割であったのに対し、第4曲目で初めて3度の音程関係のメロディーを同時に演奏する。第2曲目でも音の一体感があったがリズムの勢いが前面に出ていた。3度の音程関係を視唱する練習として、譜例18のように2声に分かれてお互いに聴きあいながら途中の借用和音の響きにも注意しハーモニーを作る練習をし、シューマンが作曲した和声、メロディー、そして拍の流れを体感する。

譜例 18 第4曲 ヴィオラパートとピアノの右手パート (第1小節～第22小節)

31小節目から転調するが、まず楽譜を見ないで音楽を聴き何調に転調したかを考える。F-durに転調したことが分かったら次にD-durとF-durの関係性を考える。D-durの同主調d-mollの平行調がF-durである。第2曲目でもF-durが使われていたという調性関係を確認する。D-durからF-durへどのように転調していくか、譜例19の和声聴音をする。譜例19は、26小節目から34小節目までを簡略化した課題であり、この課題の2、3小節目を見ると、D-durの1度の和音から主音が半音下がり、Cis A Fis AとD-durの3度の和音が鳴る。その後FisとCisがさらに半音下がりF-durの1度の第2転回形へ転調している。F-durのサブドミナントやトニックといった転調の準備はない。また1度の第2転回形からF-durが始まることも注目すべき点である。聴音をした後は実際の楽譜を見てどこにどの和声があてはまるかを考える。

譜例 19 作成課題

40小節目のアウトタクトから16分音符の3連符が入りピアノの伴奏形が変化し、ヴィオラにまたメロディーが戻る。強弱に注目するとfpやcrescendoの表記があり、この楽章の中では起伏の激しさのある場面である。譜例20は40小節目のアウトタクト～50小節目までを12小節間にまとめた和声課題である。5、6小節目などに多少借用和音が入るが基本的には難しい和声は使われていない。この課題を実施し、実際の楽譜を見て、それぞれどこの小節にあてはまるかを考える。余裕があればメロディーのどこに非和音が含まれているか考えると良い。

譜例 20 作成課題

54小節目から64小節目までのピアノ伴奏をピアノで演奏し、どのようにF-durからD-durに戻っているかを大まかな和音記号、またはコードを聴きとる練習をする。これは実際の和声課題というよりは音楽の流れを実際の曲から聴いてつかむ練習である。コードで表すと、F - F7 - Bb- (C7を經由) - G7 - C7 - F - D (主和音保続が4小節間続く) - A7 - Dという進行が聴き取れるようにする。

最後の4小節間のピアノに注目する。91小節目にD-durの主和音が響き、92小節目の1拍目の表拍に4度調の属7の和音が鳴る。裏拍でバス音がDからCisに下がり、Cis C Fis Aという不響和音が一瞬響く。2拍目で4度の和音になり93小節目で属9の根音省略の第1転回形から1度の和音で終止する。この属9の根音省略の第1転回形からの主音という終わり方、また不協和音を最後の方に配置するというのは特殊で、少し不安定な宙に浮いたような感覚が残る。これはシューマンの作曲のセンスと特徴の1つであると感じる。

4 まとめ

《おとぎの絵本》は第1曲～第4曲目までそれぞれ特徴があり、想像しやすいと前述したが、演奏するにあたっては、それぞれの特徴(リズム、メロディーが転調していく様子など)をしっかりと表現しなければならないという点では難易度の高い作品である。リズム、音とハーモニーの移り変わり、ヴィオラとピアノの合わせに瞬時に対応するにはソルフェージュ能力と音楽の理解が求められる。また全曲通して学習することにより、調性、拍子の関係性、そして曲調の対比が出来、演奏者は曲の全体像を把握して表現することの大切さを理解出来る。これから先の演奏する曲において、曲のどこに注意して読譜、解釈をするか自分自身で考える力をやしなうため、第1曲目から第4曲目までの特徴的な部分を抜き出した課題を示した。学習者には課題を実施し、理論的なことも考えながら音楽を感じ、表現する力を身に付けてほしい。

引用楽譜

Schumann, Robert. 1991. *Märchenbilder Vier Stücke für Viola und Klavier op.113*. Joachim Draheim (ed.). Wiesbaden: Breitkopf & Hartel, 7.

参考楽譜

Schumann, Robert. 1991, *Märchenbilder Vier Stücke für Viola und Klavier op.113*. Joachim Draheim (ed.) .
Wiesbaden: Breitkopf & Hartel.